特集

世界の屋根に初めて鉄道が走った

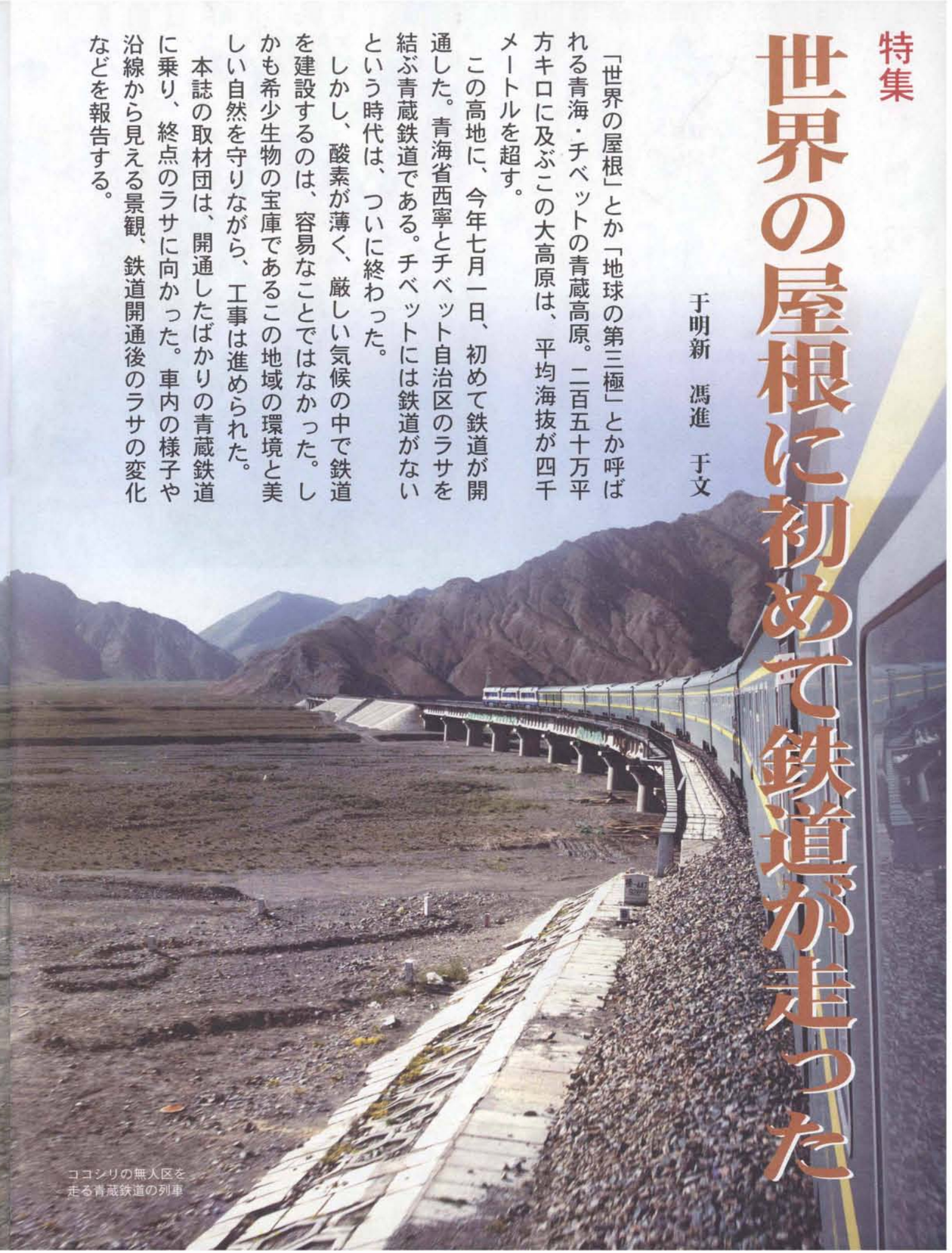
于明新　馮進　于文

「世界の屋根」とか「地球の第三極」とか呼ばれる青海・チベットの青蔵高原。二百五十万平方キロに及ぶこの大高原は、平均海抜が四千メートルを超す。

この高地に、今年七月一日、初めて鉄道が開通した。青海省西寧とチベット自治区のラサを結ぶ青蔵鉄道である。チベットには鉄道がないという時代は、ついに終わった。

しかし、酸素が薄く、厳しい気候の中で鉄道を建設するのは、容易なことではなかった。しかも希少生物の宝庫であるこの地域の環境と美しい自然を守りながら、工事は進められた。

本誌の取材団は、開通したばかりの青蔵鉄道に乗り、終点のラサに向かった。車内の様子や沿線から見える景観、鉄道開通後のラサの変化などを報告する。



ココシリの無人区を走る青蔵鉄道の列車

列車で行くチベットの旅

西寧からラサに向かうK917列車

酸素を積んだ高原列車

アンギャンドジさん（三十一歳）は、青蔵鉄道の列車の窓側の席から、じっと目を凝らして外の風景を見ていた。彼は青海省玉樹チベット族自治州のサゲ寺のラマ僧である。彼は母親を連れてラサに巡礼に行くところだ。母子とも に、汽車を見るのも、汽車に乗るのも初めてである。

青蔵鉄道は人気が高く、汽車の切符はなかなか買えない。アンギャンドジさんはこの日の朝一番に、西寧駅の切符売り場にやってきた。そして五十分ほど並んで、二枚の切符を買うことができた。「本当にうれしい。感動です」と、彼はあまり流暢ではない中国語で繰り返した。彼は、生まれて初めての汽車の旅を、ずっと楽しみにしていたのだ。

列車の車両はすべて密封されていて、外気は遮断されている。アンギャンドジさんが座っている「硬座」（二等車）の車両は、定員九十八人。普通の列車の「硬座」の定員は百八人だから、座席と座席の間隔は広く、座席も快適にできている。

「軟臥」（一等寝台）の車両の定員は三十二人で、これも普通の「軟臥」の定員より四人少ない。一つのコンパートメントには四つのベッドがあり、どのベッドにも液晶テレビが備え付けられ、テレビや映画を見ることができる。乗務員を呼ぶボタンがあって、呼べばいつでも来てくれる。

「硬臥」（二等寝台）は定員六十人。六人で一つのコンパートメントだが、通路との間に仕切りはない。ベッドの幅は、通常よりやや広い。

食堂車は定員四十四人。車内販売の弁当は一つ二十元（約三百円）。カウンターもあって、酒や飲み物を売っている。しかし列車が海抜の高いところを走っているときは、乗務員が旅客に酒を飲まないよう勧めている。高山病に罹ったり、その症状が激化するのを避けるためだ。

乗務員はカートを押して、車内で食品や飲料を売りに来る。ある乗客は、ピーナツを買おうとしたが売り切れだったので、乗務員に「すぐほしい」と言った。しかし乗務員は「二時間後です」という。乗客は、この列車のサービスは悪いと思ったが、実は、高地を走る列車では、酸素の欠乏によって高山病が起こり易いので、乗務員は一定の仕事をした後、必ず休息をとるように決められているのだ。

汽車を見るのも、汽車に乗るのも初めてのアンギャンドジさん（中央）

高地を走る列車内の酸欠問題を解決するため、青蔵鉄道では列車内の酸素の量を自動調節する酸素供給システムを備えた。青海省のゴルムドからチベット自治区のラサまでの区間を行くときは、車内に設置された酸素供給口から酸素が自動的に出てくる。これは酸素の濃度を終始、人体に適した水準に保ち、旅客が高山病に罹らないようにするためだ。

座席やベッドの側にも酸素供給の差込み口がある。旅客はここから引いたチューブを鼻に挿して酸素を吸う。もし急病人が出たら、救急医療室で応急手当を受けるこ